



ステンレス溶接技能者 大岩和己さん

もり 森 かず 和 お 夫

大学開放実践センター・教授（職業能力開発）

四国化工機株式会社はユニークな企業である。パッケージ機械の製造メーカーなのに豆腐の製造販売もしている。自社製造の機械を使うことでノウハウを蓄積し、研究開発や改良に役立っているという。パッケージする食品は牛乳やプリン、ジュース、酒などさまざま。パッケージも紙からプラスチックまで多彩だ。充填機械製造事業、包装資材事業、食品事業を展開している。本社工場は板野郡北島町（電話089-698-4141 <http://www.shikoku-kakoki.co.jp>）徳島大学常三島キャンパスから車で約20分の距離にある。

完璧に挑む

充填機械を製造する大岩和己（おおいわ・かずみ）さんに「どんな仕事をしているのですか」と尋ねた。「ステンレスの溶接です」と答えた。溶接は金属を溶かして接合する技術・技能である。とてもカン・コツのいる仕事だ。まして、食品用機械だから、ピンホール（細かい穴）を皆無にする必要がある。食品がピンホールに入ると、そこで細菌が繁殖する。1台の機械は何百という部品で構成するのだが、部品のどれも完璧でなければならぬのである。大岩さんは「クレームのないことが喜びです」と語る。それほどパーフェクトが求められるのだ。



難しい二重パイプの加工

メーカーは顧客のさまざまなニーズに応えるため、新しい機械を設計する。加工を担当する職人たちは難題を突きつけられるのであった。しかし、挑戦することで技を磨き、工夫で乗り切るのが職人たちの常であったに違いない。ある時、さすがに難しい加工にあたった。二重パイプで、しかも曲がったパイプの加工である。内側のパイプの両面はサニタリー性（衛生的性質）を持たせなければならぬ。外側のパイプの内側も同様とすれば、かなり過酷な条件といえる。パイプを少しずつつなぎ合わせることで可能にしたという。画期的な方法だ。この着想はどのようにして生まれたのだろうか。「誰にも聞くところがないんです。自分で考え、やるしかない。」と語る。恐らく、集中力と試作と思考の連続の結果、生み出されたのであろう。

一人前までの道程

一人前で仕事ができるには約5年か

かり、自信をもって仕事ができるにはさらに5年かかる。どうやって身につけてきたのだろうか。すると、「技術は見て盗む」という答えが返ってきた。先輩のやるのを見て学ぶ。「聞けば教えてくれるが、何を聞くかはやってみないとわからない」という。全て教えてはくれないので、自分でやって、覚えて、応用することが必要になる。その後で知識にするのである。技が確かなものとして根付くには、考え、体験し、工夫することだ。いわば職人の学びの基本のように思う。

材料を知り、材料に合わせる

溶接でうまくゆくにはどうすればよいのだろうか。「始めの頃は溶接がどんなものか、なぜひつつくかわからなかった」と言う。しかし、5年くらいすると「考えるようになり、わかってきました。材料の性質を知ることができた。それに合わせてひつつければいい。この頃に材料の知識を学んだのですが、これが経験と結びついて、よくわかったのです。」と結んだ。

職人は自然に逆らわない。自然界の道理を尊び、それを曲げるのではなく積極的に利用して、自分自身を合わせて生きていくのである。それが、先端技術を応用した機械の製造に携わる大岩さんの哲学として生き続けているのだと感じた。